中・高校生が求める理想の教師像
－「教職実践演習」カリキュラム開発のために－

小柴　孝子[1]
武田　明典[2]
村瀬　公胤[3]

要　旨

「教職実践演習」の新設をはじめとし、教員養成の大学でより実践力のある教員が求められている現在、中・高校生はどのような教員を求めているかについて、質問紙調査を実施した（有効回答 2,161 名）。3 部構成の調査内容は、1）生徒が理想とする教師像に関する 20 項目；2）中央教育審議会による「教職実践演習」授業内容例の 9 つのキーワードをもとにした 9 項目；3）教職志望の学生に期待することについての自由記述である。

その結果、中・高校生の理想の教師像は、「わかりやすい授業をしてくれる先生」であった。また、教師への要望についての中・高校生の意識比較では、中学生の方が有意に高く、性差の比較では、一つの項目を除いて、中・高校生ともに男子よりも女子の方が有意に高かった。自由記述回答では、回答得点の上位と下位の比較から特徴的な記述がみられた。

キーワード：理想の教師像、中学生、高校生、教職実践演習

[1] Takako KOSHIBA　神田外語大学
[2] Akenori TAKEDA　神田外語大学
[3] Masatsugu MURASE　麻布教育研究所／名護市教育委員会

1．問　題

教職課程に新設された必修科目「教職実践演習」は、2013 年度後期より 4 年制大学において授業が展開される。この科目では、大学生が教師になるべく教科や生徒指導について学び、また、教育実習を行った後の省察を基に、教職に就くことの意識を再確認する狙いがある。この「教職実践演習」カリキュラム開発のために、武田ほか（2013）は、中央教育審議会が示した授業内容例を参照して 9 項目から成る質問紙を作成し、A 県新任教員を対象とした調査を行い、項目間、中学･高校教師間、性別において有意な差を見出し、新任教員のニーズの特徴を明らかにした。本研究では、中・高校生を対象に 3 部構成の質問紙を作成し､この 9 項目の調査と同一内容の項目（第 2 部）と、生徒が理想とする教師像に関する 20 項目（第 1 部）でニーズを尋ね、これから教師を目指す学生に対してどのようなことを期待するのか自由記述で回答させる（第 3 部）調査を行った。本研究は、これらの調査結果から、生徒の求める教師像について総合的に検討を行うものである。

教員の資質と能力に関し､「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（中央教育審議会 , 2006）の答申では、教員に求められる資質能力を確実に身に付けることの重要性、最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていく「学びの精神」がこれまで以上に強く求められている。また､「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（中央教育審議会 , 2012）では、これからの教員に求められる資質能力として、1）教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力；2）専門職としての高度な知識・技能；3）総合的な人間力を取り上げている。浅田（2010）は、これからの学校に求められる教師像を考える中で、現代社会における教師の専門性は、長期にわたる訓練と専門化によってはじめて獲得されるとし、今後さらに反省的実践家としての教師が求められるとしている。

また、近藤・岡村・保坂（2000）は、学校臨床の領域でも自ら学ぶ者のみ

が人に学ぶことを「教える」ことができ、自ら変化するものが人を変化「させる」ことができるとしている。ここでは、まず理想の教師像を明らかにするために、教員養成過程に在籍している学生を調査対象にしている研究を報告する。長谷川（2003）は、教職課程履修者及び教育学科在籍者が描く教師像が大学在学中にどのように変化するのかについて、教師イメージの選択肢による回答結果の推移と、理想の教師論や教職への不安についての自由記述から検討している。理想の教師像における「対人的側面」では、情緒的・感情的なものから情感を含んだ指導的なものへ変化する傾向を明らかにしている。さらに、山根・古市・木多（2010）は、教育学部 3 回生、教育学研究科生、養護教諭特別別科学生合計 281 名を対象にして、理想の教師像に関する 20 項目の質問紙法による調査を行った。回答の上位の項目では、「子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる先生」「子どもの日々の変化に気づくことができる先生」「子どもの人格を尊重することができる先生」など、理想の教師像では、子どもとの関わりが最も重要であることを明らかにした。弓削（2013）は、教員養成系大学の 1 年生に対して調査し、小学校 5・6 年時の担任教師の回想を通して、児童が教師に自分を一個人として扱ってほしいという個人的関係を求めることが多いと報告している。

次に、教員、保護者、小中高校生、学校管理者、学校評議委員を調査対象にした千葉大学教育学部の報告書の中で、上杉（2008）は、千葉県の児童・生徒、保護者、一般市民、行政関係者、教員合計 2,942 名に、共通した 28 項目を用いて質問紙による調査を行った。この結果、小学生の 28 項目のうちの上位 5 位は、1）頼りになる；2）授業が上手い；3）気軽に会話できる；4）笑顔が多い；5）他の先生から信用であった。同様に中学生では、1）授業がうまい；2）気軽に会話できる；3）他の先生から信用；4）話がうまい；5）頼りになるなど、順位は入れ替わるものの 4 項目が共通であり、「授業がうまい」以外は教師との関係性を重視した結果となった。また、千葉市教育

センター（2010）では、「教師力に関する研究」と題して、教員に求められる資質能力を、あえて幅の広い概念である“教師力”ととらえ、教鞭をとる教職歴 10 年以内の“達人”（ベテラン）と呼ぶ若年層教師 29 名について対面ないしはメールでのヒアリング調査を行った。その結果、上位 3 位は、1)「幅広い知識と深い教材研究」; 2)「わかりやすい発問の工夫」; 3)「子どもの実態に応じて興味関心をもたせる」のように、学習面を重視していた。

村越・谷田貝・青柳（2010）は、望ましい教師像として、埼玉県・神奈川県・新潟県・福岡県の小中学生、保護者、教師、学校管理者合計 1,917 名に対して質問紙調査を行った。保護者は、望ましい教師像として、「常識と責任感があり、子どもが好きでよく理解できる、心身共に健康な教師」、小学校教師は、「常識と向上心があり、子どもが好きでよく理解できる、心身共に健康な教師」、中学校教師は、「常識と責任感があり、子どもが好きでよく理解でき、専門的知識を持って教えることができる教師」であるとしている。小中学生は、「親切で，明るく元気で，自分たちの気持ちがよく分かり、いつも一生懸命考えてくれる」先生を望ましい教師像としている。

また、渡辺（2011）は、神奈川県教育委員会と連携して、教員・保護者・小中高校生・学校管理者・学校評議委員、合計 10,795 名を対象に調査研究を行っている。1)「わかりやすい授業をする」;2)「児童生徒の理解」;3)「やる気を出させ、意欲を高める」の上位 3 項目は、教員と児童・生徒が完全に一致し、現在の学校の状況をよく表していると報告している。望月（1998）は、子どもの「将来の職業としての教師」「教師の評価とイメージ」「子どもたちの求める教師」の統計調査データを基にしながら、理想の教師像を提示している。赤坂（2011）のように、自らの教師としての実体験から、具体的な事例を通して、信頼される教師になるための指針を取り上げているものもある。他には、小学生を対象とした教師像の調査（深谷，1984）や、学校管理職による理想の教師についてのイメージ調査（菊池，1972）がある。

このように、教師のあるべき資質や理想の教師に関しては、古くから研究が行われ、教育学者による議論がなされていた。しかしながら、実際に、教師から“教育を受ける”児童生徒についての調査は、本稿で紹介した少数の文献に限られている。ここで、児童生徒による理想の教師についてニーズを把握したうえで、教師像について議論することは重要と考え、本研究では、児童生徒の教師に対する期待やニーズについて検討を行う。

２．目　的

本研究の目的は、中･高校生が求める理想の教師像についての調査として、中・高校生に対する質問紙調査法を行うことにより、これから教師になる者にどのようなことを期待しているかを把握し、「教職実践演習」のカリキュラム開発のためのニーズについて検討を行うことである。

３．方　法

3. 1　調査対象者および調査時期

調査対象者は、A 県内公立中学校 2 校（1 ～ 3 年生；n=1,041）、および、A 県内公立高等学校 2 校（1 ～ 3 年生；n=1,120）の合計 2,161 名であった。なお、4 校の回収率は、90.4％であった。

調査時期は 2013 年 7 月であった。調査方法としては、次の質問紙を各学校に配布し、担任が学級活動やロングホームルームなどの時間を用いてクラス単位で調査用紙を配布・趣旨説明・実施・回収を行った。

無記名式の質問紙は、A3 版両面に印字され、質問紙調査の目的、「教職実践演習」についての概要、データ処理、そして、プライバシーの保護について言及し、賛同が得られた者が回答するという手順であった。

3. 2　質問紙調査項目

調査対象者の性別、学校種、および、学年を問うフェースシートに加え、以下、問 1 ～ 3 の 3 部構成による質問項目に対して回答を求めた。

（1）問 1：「あなたにとって理想の先生とはどのような先生ですか」

ここでは、山根・古市・木多（2010）が教員志望の大学生を対象にして行った、理想の教師像に関する 20 項目の質問を参照し、本研究でも同じ項目を用いて質問した（Table 1）。

それぞれ、1.「重要でない」から、5.「とても重要である」までの 5 件法で回答を求め、1 ～ 5 点の数値によってデータ処理した（逆転項目はなし）。なお、調査時には全 20 項目を実施したが、分析時には後述の因子分析の結果をふまえ、質問 9 および 12 を除いた 18 項目のみを分析対象とした。

（2）問 2：「これから学校の先生になる人には、どのようなことをがんばって（勉強して）ほしいと思いますか」

ここでは、中央教育審議会答申（2006）が例示した「教職実践演習」の 9 つの科目内容（Table 2）を、中・高校生に向けた 9 つの質問項目として再構成し、これから学校の先生になる人にどのような学習を期待しているかについて、1.「がんばってほしいと全然思わない」から、5.「がんばってほしいととても思う」までの 5 件法で回答を求めた。回答結果は、1 ～ 5 点の数値によってデータ処理した（逆転項目はなし）。結果の分析･考察の便宜のため、Table 2 の右端列に、それぞれ文中の語句を用いて作成したキーワードを示す。

（3）問 3：「これから先生になろうと勉強している大学生に、どのようなことをがんばってほしいと思いますか」（自由記述）

問 1・2 の質問項目に加え、中・高校生の教員に対するニーズについてさらに幅広く調査するため、ここでは自由記述で回答を求めた。とくに、教員に対するニーズの高い生徒と低い生徒でどのようなニーズの違いがあるかを調査するため、分析時には問 1、2 の質問項目でニーズ得点の上位および下

位それぞれ 10％の回答を分析対象とした。

Table 1
質問紙問 1 の質問項目

番号	質問項目
1	わかりやすい授業をする先生
2	教職員と協力をすることができる先生
3	生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生
4	クラスをまとめることができる先生
5	学校のきまりなどをきちんと守らせる先生
6	魅力的（みりょくてき）な学級・学年・学校行事を計画することができる先生
7	保護者と連携（れんけい）することができる先生
8	教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲をもった先生
9	生徒の日々の変化に気づくことができる先生
10	礼儀正しい先生
11	だれからも学ぼうとする謙虚（けんきょ）さをもつ先生
12	生徒の人格を尊重する先生
13	社会の変化にともなう教育課題に対応できる先生
14	授業に全力で取り組む先生
15	教職員と積極的に意見交換をする先生
16	だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生
17	教育にかかわる信念を持っている先生
18	生徒の成長に喜びを感じる先生
19	地域と連携（れんけい）することができる先生
20	豊かな教養を備えた先生

Table 2
質問紙問 2 が参照した中央教育審議会答申の内容

番号	項　　目	キーワード
1	様々な場面を想定した役割演技（ロールプレーイング）や事例研究のほか、現職教員との意見交換等を通じて、教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務等について学ぶ。	教員役割
2	学校において、校外学習時の安全管理や、休み時間や放課後の補充指導、遊びなど、子どもと直接関わり合う活動の体験を通じて、子ども理解の重要性や、教員が担う責任の重さについて学ぶ。	子ども理解
3	役割演技（ロールプレーイング）や事例研究、学校における現地調査（フィールドワーク）等を通じて、社会人としての基本（挨拶、言葉遣いなど）について、また、教員組織における自己の役割や、他の教職員と協力した校務運営の重要性について学ぶ。	教員組織
4	関連施設・関連機関（社会福祉施設、医療機関等）における実務実習や現地調査（フィールドワーク）等を通じて、社会人としての基本（挨拶や言葉遣いなど）について、また、保護者や地域との連携・協力の重要性について学ぶ。	地域連携
5	教育実習等の経験を基に、学級経営案を作成し、実際の事例との比較等を通じて、学級担任の役割や実務、他の教職員との協力の在り方等について学ぶ。	学級担任
6	いじめや不登校、特別支援教育等、今日的な教育課題に関しての役割演技（ロールプレーイング）や事例研究、実地視察等を通じて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応について学ぶ。	事例研究
7	役割演技（ロールプレーイング）や事例研究等を通じて、個々の子どもの特性や状況を把握し、子どもを一つの学級集団としてまとめていく手法について学ぶ。	学級集団
8	模擬授業の実施を通じて、教員としての表現力や授業力、子どもの反応を活かした授業づくり、皆で協力して取り組む姿勢を育む指導法等について学ぶ。	模擬授業
9	教科書にある題材や単元等に応じた教材研究の実施や、教材・教具、学習形態、指導と評価等を工夫した学習指導案の作成を通じて、学習指導の基本的事項（教科等の知識や技能など）について学ぶ。	学習指導案

4．結　果

質問紙調査の結果を以下に記す。

4.1　中・高校生の理想：ニーズの違い

質問紙問 1「あなたにとって理想の先生とはどのような先生ですか」で尋ねた 20 項目のうち、後述の因子分析によって除外した 18 項目の結果について、本節で報告する。

まず中・高校生で比較すると（Figure 1）、全ての項目で中学生のニーズが高校生より高い傾向がみられた。中学生と高校生で共通してニーズが高かったのは、項目 1「わかりやすい授業をする先生」や項目 3「生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生」であり、共通して低かったのは項目 19「地域と連携することができる先生」であった。

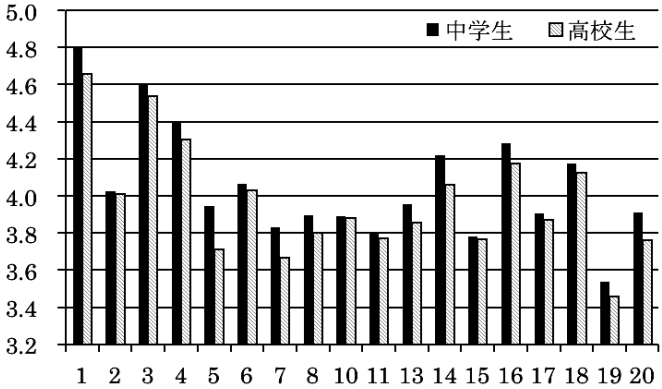

Figure 1　学校種別による 18 項目のニーズの違い

さらに、これら 18 項目の中学生と高校生の平均点の差について *t* 検定を行った（Table 3）ところ、項目 1，4，5，7，14，16，20 で 1% 水準の有意差があった。また、項目 8，13 で 5% 水準の有意差があった。

Table 3
学校種別による 18 項目のニーズ平均点

		1	2	3	4	5	6	7	8	10
中学生	平均	4.81	4.02	4.60	4.40	3.95	4.06	3.83	3.90	3.89
n=1,041	偏差	0.55	0.91	0.76	0.83	1.01	0.96	1.01	0.97	1.02
高校生	平均	4.65	4.01	4.54	4.30	3.71	4.03	3.67	3.80	3.88
n=1,120	偏差	0.74	0.88	0.80	0.87	1.00	0.95	0.97	0.91	0.98
	t 値	5.45**	0.32	1.87	2.73**	5.45**	0.78	3.84**	2.31*	0.19

* $p<.05$, ** $p<.01$

		11	13	14	15	16	17	18	19	20
中学生	平均	3.80	3.96	4.22	3.78	4.29	3.91	4.17	3.54	3.91
n=1,041	偏差	1.00	0.93	0.94	0.96	0.96	0.95	0.97	1.01	0.95
高校生	平均	3.77	3.86	4.06	3.77	4.17	3.87	4.13	3.46	3.76
n=1,120	偏差	0.98	0.88	0.91	0.89	0.97	0.91	0.95	0.99	0.96
	t 値	0.72	2.53*	4.02**	0.33	2.68**	0.86	1.14	1.84	3.58**

* $p<.05$, ** $p<.01$

次に、同項目で性差があるかについて検討した（Figure 2）。項目 20「豊かな教養を備えた先生」で男子が女子よりニーズが高かったほかは、全ての項目で女子のニーズが男子より高かった。そこで *t* 検定を行ったところ、項目 1，2，3，4，10，11，15，16，18，19 で 1% 水準の有意差があり、項目 5，13，14，17 で 5% 水準の有意差があった（Table 4）。

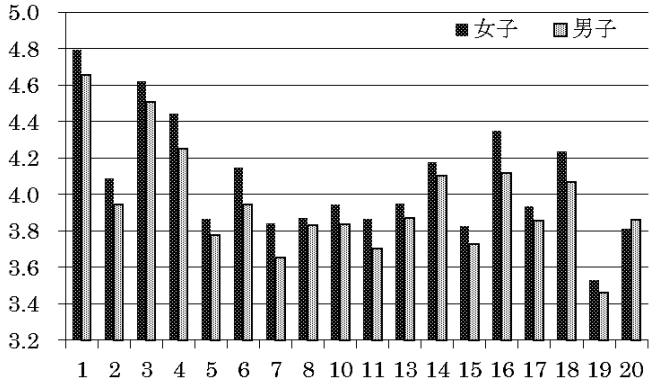

Figure 2　性別による 18 項目のニーズの違い

Table 4
性別による 18 項目のニーズ平均点

		1	2	3	4	5	6	7	8	10
女子	平均	4.79	4.08	4.62	4.44	3.87	4.15	3.84	3.87	3.94
n=1,108	偏差	0.57	0.83	0.73	0.78	0.98	0.89	0.93	0.91	0.96
男子	平均	4.66	3.95	4.51	4.25	3.78	3.94	3.65	3.83	3.83
n=1,053	偏差	0.74	0.96	0.83	0.91	1.04	1.01	1.05	0.98	1.04
	t 値	4.65**	3.53**	3.30**	5.19**	2.10*	4.93**	4.57**	0.99	2.75**

* $p<.05$, ** $p<.01$

		11	13	14	15	16	17	18	19	20
女子	平均	3.86	3.95	4.18	3.83	4.34	3.93	4.24	3.53	3.81
n=1,108	偏差	0.96	0.87	0.89	0.89	0.91	0.89	0.9	0.95	0.94
男子	平均	3.71	3.86	4.09	3.72	4.1	3.84	4.05	3.46	3.86
n=1,053	偏差	1.02	0.95	0.97	0.95	1.01	0.97	1.01	1.05	0.99
	t 値	3.60**	2.35*	2.20*	2.80**	5.81**	2.36*	4.42**	1.70**	-1.20

* $p<.05$, ** $p<.01$

4. 2　中・高校生の理想：上位５項目

質問紙問 1 で中・高校生が回答した理想の先生について、上位 5 項目を Table 5 に挙げる。

Table 5
中・高校生の理想の先生上位 5 項目

	中　学　生	高　校　生
1 位	わかりやすい授業をする先生	わかりやすい授業をする先生
2 位	生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生	生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生
3 位	クラスをまとめることができる先生	クラスをまとめることができる先生
4 位	だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生	だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生
5 位	授業に全力で取り組む先生	生徒の成長に喜びを感じる先生

上位 5 項目の比較では、「わかりやすい授業をする先生」を最上位に挙げている。生徒は、授業力が教師にとって最も重要であると考えている。中・高校生ともに、「生徒とのコミュニケーション」「クラスをまとめることができる」「だれに対しても笑顔で明るくかかわる」先生のニーズが高く、学級経営力を求めている。

4. 3　中・高校生の理想：尺度の因子分析

質問紙問 1 で尋ねた 20 項目について、探索的因子分析（最尤法；プロマックス回転）を施したところ、3 因子の構造が得られた。因子負荷量が .40 に満たない項目を削除し、因子分析を重ねて行い、最終的に 18 項目が残った（Table 6）。3 因子の累積負荷量は *44.40%*、α 係数は *.91* であった。

Table 6
理想の先生尺度の因子分析結果（*N*=2,161）

		因子 1	因子 2	因子 3
因子 1：教育態度				
8	教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲をもった先生	**.64**	.07	-.11
10	礼儀正しい先生	**.62**	.00	.01
20	豊かな教養を備えた先生	**.62**	-.09	.11
15	教職員と積極的に意見交換をする先生	**.61**	.00	.14
19	地域と連携することができる先生	**.60**	-.13	.22
5	学校のきまりなどをきちんと守らせる先生	**.60**	.26	-.29
13	社会の変化にともなう教育課題に対応できる先生	**.59**	.03	.01
11	だれからも学ぼうとする謙虚さをもつ先生	**.57**	-.03	.17
17	教育にかかわる信念を持っている先生	**.56**	-.09	.32
7	保護者と連携することができる先生	**.53**	.20	-.06
14	授業に全力で取り組む先生	**.52**	.13	.09
因子 2：教育技術				
3	生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生	-.23	**.75**	.26
4	クラスをまとめることができる先生	.11	**.58**	.01
1	わかりやすい授業をする先生	.05	**.53**	.01
6	魅力的な学級・学年・学校行事を計画することができる先生	.17	**.42**	.12
2	教職員と協力をすることができる先生	.27	**.41**	-.01
因子 3：教育志向				
18	生徒の成長に喜びを感じる先生	.13	.08	**.65**
16	だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生	-.04	.23	**.61**
	因子間相関	1	2	3
	1	-	.59	.60
	2	-	-	.52

抽出された 3 個の因子について、第 1 因子は、教育に対する態度、姿勢としての「教育態度」、第 2 因子は、学級経営や授業スキルとしての「教育技術」、第 3 因子は、明朗さやポジティブな感覚としての「教育志向」と名付けた。

理想の教師像として、中学生は「教育技術」のニーズが高く、他方高校生は「教育技術」と「教育志向」のニーズが高いことがわかった。

4. 4　中・高校生の教師に求めること

質問紙問 2「これから学校の先生になる人には、どのようなことをがんばって（勉強して）ほしいと思いますか」で尋ねた 9 項目について、中・高校生のニーズについて検討した（Figure 3）。項目 2「子ども理解」、項目 8「模擬授業」のニーズが高く、項目 4「地域連携」が、最もニーズが低かった。全ての項目で中学生のニーズが高校生より高かったため、*t* 検定を行ったところ、項目 1~9 の全てで、1％水準の有意差があった（Table 7）。

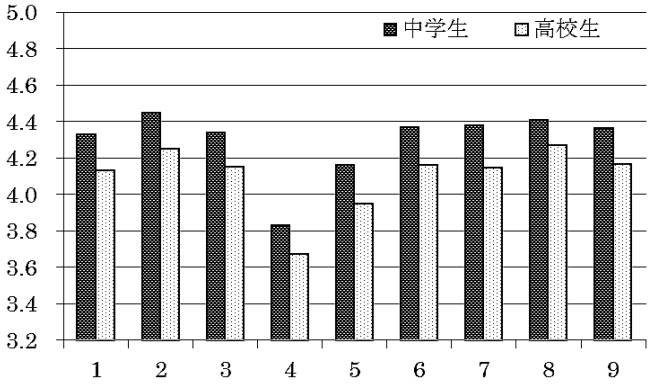

Figure 3　校種別による 9 項目のニーズの違い

Table 7
校種別による 9 項目のニーズ平均点

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
中学生	平均	4.33	4.45	4.34	3.83	4.16	4.37	4.38	4.41	4.36
n=1,041	偏差	0.77	0.77	0.81	0.94	0.82	0.85	0.85	0.80	0.83
高校生	平均	4.13	4.25	4.15	3.67	3.95	4.16	4.14	4.27	4.17
n=1,120	偏差	0.82	0.81	0.83	0.91	0.88	0.85	0.88	0.84	0.85
	t 値	5.80**	5.88**	5.29**	3.98**	5.82**	5.67**	6.28**	3.86**	5.41**

** $p<.01$

4.5　自由記述の主なコメント

質問紙問 3「これから先生になろうと勉強している大学生に、どのようなことをがんばってほしいと思いますか」では、自由記述で回答を求めた。この回答の分析にあたり、問 1 と問 2 の尺度で回答得点の高い、先生への要望を強く持っている生徒と、回答得点の低い、先生への要望をあまり持たない生徒との違いを検討するため、中学生の回答から問 1 と問 2 の得点合計の上位 10% と下位 10% の回答を抽出した。なお同点の回答が多数あるため、それぞれ 10%（104 名）を越える最初の点数を基準とした。その中から、無効回答を除いた、上位回答（*n*=90）と下位回答（*n*=62）が分析の対象である。

分析対象となった回答の全てについて、KJ 法で分類を試み、得られた回答グループには前述の 18 項目から抽出された 3 因子と 9 項目のキーワードを参照してカテゴリー名を付した（Table 8）。

上位回答の自由記述で言及が多かったものは、「子ども理解」*例：「生徒の日々のささいな変化にも気付いてほしい」*、「教育技術（授業スキル）」*例：「わかりやすくて楽しい授業にすることができる先生になってほしいと思います。」*などがあった。

下位回答の自由記述で言及が多かったものは、「子ども理解」*例：「生徒の気持ちを理解できる人が希望の先生です。」*や「教育技術（授業スキル）」*例：「必要最低限の生徒への関心と分かりやすい授業さえあればそれでいいと思います。」*などがあった。

上位と下位の回答を比較して特徴的な記述としては、上位に「教員役割」*例：「このアンケートは、ほとんど「5」をつけました。このアンケートに書いてあることが、全てできる先生がいたらとてもうれしいです。」*や「教育技術（学級集団）」*例：「学級全体をしっかりとまとめられる先生になってほしいと思う。」*といった回答があった。一方、下位回答では、「人柄」*例：「やさしい先生になってくれればいいと思う」*や「体罰」*例：「暴力などたいばつ（ママ）をなくし、公共のマナーを守ること。」*といった回答があった。

Table 8
得点上位回答（*n*=90）および下位回答（*n*=62）の自由記述の分類

上位	9項目カテゴリー				教育技術			教育志向		教育態度		
カテゴリー	1 教員役割	2 子ども理解	3 教育組織	6 事例研究	授業スキル	コミュニケーション力	学級集団	明朗さ	平等・公平	人柄	体罰	その他
回答数	8	20	5	7	21	7	7	3	7	4	0	1

下位	9項目カテゴリー				教育技術			教育志向		教育態度		
カテゴリー	1 教員役割	2 子ども理解	3 教育組織	6 事例研究	授業スキル	コミュニケーション力	学級集団	明朗さ	平等・公平	人柄	体罰	その他
回答数	1	12	2	8	14	4	1	1	4	9	2	4

5．考　察

5.1　中・高校生が求める理想の教師像

本研究では、理想の先生（Figure 1；Table 5）として、最上位の「わかりやすい授業をする先生」から、「生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生」「クラスをまとめることができる先生」「だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生」の 4 位までが、中・高校生ともに同じ順位であった。また、教師に求めること（Figure 3）では、「模擬授業」「子ども理解」のニーズが高かった。これらの結果は、次の二点で注目すべきことである。

一つは、中・高校生は、「わかりやすい授業をしてくれる先生」に教えてもらいたいと思っていて、授業力が教師にとって重要であると考えていることである。上杉（2005）、渡辺（2011）、武田ほか（2013）の教員を対象とした調査でも同様の傾向がみられていることから、中・高校生と教員の双方が「わかりやすい授業」を求めていると理解できる。「わかりやすい授業」とはどのような授業なのか。千葉市教育センター（2010）は、教職歴 10 年以内の教師（教師力の伸びると思われる時期）の調査で、「幅広い知識」「深い教材研究」「わかりやすい発問」「子どもの実態に応じた」を報告している。大学から就職後 10 年くらいを見通して、「わかりやすい授業」を軸に専門性を学べるよう、大学と教育行政の協働が求められている。

第二の注目点は、中・高校生が、18 項目の因子分析から抽出された第 2 因子「教育技術」に関わる、「わかりやすい授業」をし、「生徒とのコミュニケーションが上手に」できて、「クラスをまとめることができる」先生を理想像として求めていることである。「教育技術」は、短期間で習得できるものではない。教職歴 10 年の学びが重要であると想定するならば、学び続ける姿勢を身につけさせることも教職課程の課題である。中・高校生が求める理想の教師像に近づくために、松木（2010）の「省察的実践」や浅田（2010）が指摘

している「反省的実践家」として学び続ける姿勢のスタートとして、教育実践演習を科目設計する必要がある。

5. 2　中・高校生の比較による特徴

中・高校生のニーズの差を考察する。中・高校生を比較（Figure 1；Table 2）すると、全ての項目で中学生のニーズが高く、高校生が低い傾向であった。特に 9 項目のニーズの比較（Figure 3；Table 6）では、全ての項目について 1％水準で有意差がみられ、高校生のニーズの低さが際立ってみられた。また、武田ほか（2013）の初任教員を対象とした 9 項目調査でも、中学校教員と高等学校教員の間で類似した傾向がみられた。中学生や中学校教員のニーズの高さは、中学生の方が教員との直接的な関わりが多く、関係性も高いなどの要因が考えられる。逆に高校生のニーズの低さでは、3 つの要因が考えられる。1）アンケートそのものに対するモチベーションの低さ；2）発達段階的に備わった教員の指導に対して冷静に判断できる現実検討力の高さ；3）教員の指導に対しての期待感の低さなどである。

特に、3）教員の指導に対しての期待感の低さにみられる否定的な要因に関しては、教員との関係性の低さや生徒の学習上の困難などが影響していると思われるので、今後の高校教員の養成課程の課題の一つとして考える必要がある。

5. 3　性別の比較による特徴

次に、性別のニーズの差を比較（Figure 2）すると、項目 20「豊かな教養を備えた先生」で男子が女子よりニーズが高かったほかは、全ての項目で女子のニーズが男子より高い傾向であった。12 個の項目で 1% 水準、4 個の項目で 5% 水準の有意差があり（Table 4）、女子のニーズの高さがみられた。武田ほか（2013）の初任教員を対象とした 9 項目調査でも、女性教員が男性

教員よりも高いニーズを持つなどの傾向がみられている。望月（1998）は、子どもにとっての「理想の教師像」を説明する中で、「将来の職業としての教師」の統計を示しながら、教師は女子にとっては理想の職業の一つになっていることを取り上げている。女子のニーズの高さは理想の職業との関連が深いとも考えられる。武田ほか（2013）が推察している「向学心」、「不安」、「自尊感情」などの要因を補足する要因になるかもしれない。

5. 4　自由記述回答の特徴

自由記述回答からは、教師への要望を強く持っている生徒と、回答得点の低い、教師への要望をあまり持たない生徒の差が明らかになった。

上位と下位の回答で言及が多かったものは、1)「子ども理解」と 2)「教育技術（授業スキル）」で共通している。違いは、上位回答の 3)「教員役割」*例:「このアンケートは、ほとんど「5」をつけました。このアンケートに書いてあることが、全てできる先生がいたらとてもうれしいです。」と、下位回答の 3)「人柄」例:「やさしい先生になってくれればいいと思う」*の要望である。上位回答の自由記述は、学校生活に満足している生徒の教員に対する肯定的な要望であるが、下位回答の自由記述は、学校生活に不満足な生徒の教員に対する切実な要望であることがわかる。この特徴的な記述の違いは、ほかのカテゴリーでも挙げることができる。さらに切実な要望は、下位回答だけに見られた「体罰」*例：「暴力などたいばつ（ママ）をなくし、公共のマナーを守ること。」*に記述されている。これは、今後、大学の教職実践演習の授業で扱わなければならない課題である。

5. 5　今後の課題

本研究は、理想の教師と教師に求められる資質について、子どもの立場からみた調査であった。同様の調査を小学生にも適用することによる、発達段

階的な研究を行うことが重要であろう。また、本研究の対象者である中・高校生に加え、武田ほか（2013）では 9 項目の教師に求められる資質に関して、初任教員を対象として調査を行った。今後、中堅教員、さらには、大学生をも含めた立体的な視点による研究を行い、総合的な検討が期待される。

引用文献

赤坂英二（2011）. 子どもや保護者から信頼される教師を目指して（その 4）— 今求められている教師像とは —. *就実教育実践研究*, **4**, 83–101.

浅田 匠（2010）. これからの学校に求められる教師像を考える. *教育展望* , **56**（8), 33–36.

中央教育審議会（2006）. 答申　今後の教員養成・免許制度の在り方について .（2006 年 7 月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/014.htm

中央教育審議会（2012）. 答申　教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について .（2012 年 8 月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm

千葉市教育センター（2010）. 教師力に関する研究授業の達人から学ぶ —. 千葉市教育センター教育研究部門 .

上杉賢士（2008）. スタンダード策定のための調査結果概要. 千葉大学教員養成 GP　プレ 10・ポスト 10 教員研修プログラム — 教員スタンダード策定と教員養成の課題 —. 千葉大学教育学部 .

深谷昌志（1984）. 特集：教師の仕事とは何か. *モノグラフ小学生ナウ*, vo1.**3**（9）.

近藤邦夫・岡村達也・保坂 亨（2000）. 子どもの成長　教師の成長 .　東京大学出版会 .

長谷川慶子（2003）．教師像とその変化 — 理想の教師像、教職への不安を手掛かりにして —. *立教大学教育学科研究年報* , **47**, 97–106.

菊池章夫（1972）. 理想的教師像についての一資料 —Q-typing による検討－ . *教育心理学研究* , **10**, 184–189.

松木健一(2010)．教師教育における教師の専門性の捉え直し．教師教育研究 **3**. 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻.

望月厚志（1998）. 統計・資料にみる子どもたちからみた理想の教師像 . *学校経営* , **43**（13), 44–55.

村越 晃・谷田貝公昭・青柳正彦（2010）. 望ましい教師像に関する調査研究 — 子ども・保護者・教師・学校管理者の立場から —. *目白大学高等教育研究* , **16**, 9–17.

武田明典・村瀬公胤・八木雅之・宮木 昇・嶋﨑政男（2013）. 教職実践演習のカリキュラム開発 — 初任教員のニーズ調査 —. *神田外語大学紀要,* **25**, 307-330.

渡辺克己（2011）．教員養成の充実に関する一考察 — 期待される教師の育成を目指して —. *北里大学一般教育紀要* , **16**, 126–136.

山根文男･古市裕一･木多功彦（2010）．理想の教師像についての調査研究（1）— 大学生の考える理想の教師像 . *岡山大学実践総合センター紀要* , **10**, 63–70.

弓削洋子（2013）．児童生徒にとっての教師像に見る教師の機能 — 大学生の回想を通して —. *愛知教育大学研究報告* , 62, 115–119.

謝　辞

・本研究調査実施に際し、千葉県公立中学校および高等学校の教員からご支援を賜り、また、調査に協力して頂いた生徒の皆様に感謝の意を表します。
・本研究に際して、本学「佐野学園特別研究助成（共同研究）」を受けた。